

論文審査の結果の要旨

報告番号	乙 第 1245 号	氏 名	宮 崎 あ か り
論文審査担当者	主 査 本田 孝行 副 査 小泉 知展・梅村 武司・吉澤 明彦		
<p>(論文審査の結果の要旨)</p> <p>血中 low-density lipoprotein (LDL) の上昇は粥状動脈硬化症の危険因子であるが、LDL 濃度の定量評価だけではなく、質の評価も着目されている。LDL が酸化した酸化 LDL は粥状動脈硬化症の発症および進行を促進するが、酸化 LDL が血小板凝集に及ぼす影響は定まった見解がない。そこで宮崎は次亜塩素酸処理により作製した酸化 LDL を用いて、1) 従来の比濁法よりも感度の高い散乱光法も加えて血小板凝集能測定を行うとともに、2) 血小板活性化マーカーである β-thromboglobulin (β-TG) を測定することによって、酸化 LDL と血小板凝集の関連について検討した。</p> <p>その結果以下の成績を得た。</p> <ol style="list-style-type: none">1) 比濁法による血小板凝集能測定において、LDL および酸化 LDL 存在下の精製血小板に ADP を添加すると、対照と比較して最大凝集率は LDL では低下傾向が、酸化 LDL では有意に低下した。2) LDL および酸化 LDL を精製血小板に添加すると、比濁法では最大凝集率に有意差はなかった。散乱光法においては、最大凝集率が対照と比較して LDL で有意に上昇したが、酸化 LDL では対照と比較して有意差はなかった。3) 多血小板血漿に LDL および酸化 LDL を添加し、37°C で加温すると、2 分後の β-TG の放出は、酸化 LDL 添加で高い傾向を示したが、15 分後には β-TG の放出は高い順に対照、LDL、酸化 LDL となり、酸化 LDL は対照および LDL よりも、β-TG 放出が少ない傾向が認められた。4) β-TG 高濃度試料に酸化 LDL を添加し、37°C で加温しても、時間経過に伴う β-TG 濃度の低下は認められなかった。 <p>以上より、次亜塩素酸処理により作製した酸化 LDL が血小板凝集能を促進せず、β-TG 放出を抑制することを明らかにした。また、放出された β-TG の定量によって血小板に及ぼす LDL の影響を評価できる可能性が示唆され、患者個人ごとの LDL の質の評価への利用が期待される。したがって、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。</p>			